

- 1898年・明治三十一年十二月十五日 大阪府茨木町に生まれる。
父檜次郎は三重県出身の巡査で真言宗の熱心な信者。母堂みちへは滋賀県の浄土真宗の寺に生まれる。
- 1905年・明治三十八年（六歳）四月 大阪府三島郡芥川尋常小学校に入学。
その後、吹田小学校、味生小学校、岸辺小学校と転校する。
- 1911年・明治四十四年（十二歳）三月 大阪府三島郡岸辺尋常小学校卒業。
四月 天道尋常高等小学校に入学。
- 1912年・明治四十五年（十三歳）四月 大阪府立茨木中学校に入学。同級生に川端康成がいる。
- 1915年・大正四年（十六歳）七月 杉本傳先生の引率で、四年生するとき、有志十数名と共に大和アルプス踏破。七日間の全行程五百六十七キロ（うち徒歩一七五キロ）だった。
- 1917年・大正六年（十八歳）二月 母堂、大阪府三島郡岸辺にて逝去。三月 大阪府立茨木中学校を卒業。
九月 旧制第七高等学校入学
この秋、古本屋ではじめて『歎異抄』を手にする。この時あらためて母って心に穴があいたような、深い悲しさに気づかれたという。
旧制第七学校を退学するが、その理由と時期の詳細は不明。

1918年・大正七年（十九歳）二月 仙台市で旧制二高（現東北大）の理学部助手をしていた長兄義勝氏のもとに転居。

1919年・大正八年（二〇歳）十二月 一年志願兵として野砲兵第二連隊に入隊。

1920年・大正九年（二一歳）十一月 陸軍砲兵軍曹。予備役に編入し、二高への進学を目指して勉強に専念する。

1921年・大正一〇年（二二歳）四月 第二高等学校文科乙類に入学。
この二高時代に近角常観師の「求道会」に長兄義勝氏と共に聴聞す。
二高で阿刀田教授、福島政雄先生、白井成允先生の教えを受ける。とくに福島、白井両先生とは親交が続いた。

1923年・大正一二年（二四歳）三月 予備役陸軍砲兵少尉となる。

1924年・大正一三年（二五歳）三月 第二高等学校文科乙類卒業。
四月 京都帝国大学文学部哲学科に入学。
この時、恩師西田幾多郎先生（五四歳）田辺元先生（三九歳）。
岩手県釜石市浜町の商家大坂屋の長女、大坂日與と結婚。十一月 長男

尚 誕生。

1926年・大正一五年（二七歳）八月 長女 恒子誕生。

この京大時代に鏡池会で金子大栄師、曾我量深師の法話を聴聞する。稲津紀三氏・片岡仁志氏・鹿野治助氏と出会い、親交が続く。

1927年・昭和二年（二八歳）三月 京都帝国大学哲学科卒業。同大学院に進む。帝国薬学専門学校講師となる。

1928年・昭和三年（二九歳） この頃、剣道部員有志と共に毎週一回禅寺で坐禅。

1929年・昭和四年（三十歳）四月 高知師範学校教諭となる。岩波文庫『歎異抄』『正法眼蔵随聞記』『ソクラテスの弁明』などをテキストにする。

六月 二男 明、消化不良のため逝去。

八月 二女 順子誕生。

この頃、学生達と夜を徹して酒を酌み交わし談論風発。

寺に籠ることもしばしば。

1930年・昭和五年（三十一歳） 父 檜次郎逝去。

1933年・昭和八年（三十四歳）三月 朝鮮平壤医学専門学校教授となる。この時の教え子に正食普及会運動を

行う東洋医学の河内省三がいた。この河内氏らの坐禅組（禅宗）と、奥村努氏・原東亜氏らの念仏組（浄土真宗）とで、毎週先生を中心に夜の集いを開いていた。以後法友として厚誼が続く。

1935年・昭和十年（三十六歳）十二月 三男 胖生。

1937年・昭和一二年（三十八歳）七月 四男 敦 誕生。

1938年・昭和一三年（三十九歳）九月 三女 紀子誕生。

1939年・昭和一四年（四十歳）十一月 白井成允先生の敦子夫人（四十四歳）逝去。
十二月 「白井夫人を偲びて」の文を追悼集『法雨集』に寄せる。

1941年・昭和一六年（四十二歳）二月 病気(右乾性肋膜炎)のため、平壤医学専門学校を退職、千葉県市川市の

長兄義勝氏のもとに転居静養す。

1942年・昭和一七年（四十三歳）二月 健康を回復し、北海道旭川師範学校教授として赴任する。

1943年・昭和一八年（四十四歳）六月 朝鮮の京城師範学校に教授として赴任。

1945年・昭和二十年（四十六歳） 八月 京城で終戦を迎える。

1946年・昭和二十一年（四七歳） 三月 引き揚げの最終船で釜山を発ち博多に着く。引き揚げに際し、白井成允先生直筆の「帰命尽十方無碍光如来」の掛軸を持ち帰る。家族一家は日與夫人の実家のある釜石に身を寄せる。四月 釜石中学校（現釜石南高校）に教諭として勤務。この頃釜石市宝樹寺の住職渡辺灌水師と親交を持つ。十二月 四女 具子 誕生。

1947年・昭和二十二年（四十八歳） 四月 岩手県立釜石中学校教頭となる。

1948年・昭和二十三年（四十九歳） 四月 岩手県立一関中学校（現一関一高）校長として赴任。一関中学校卒業生の佐藤豊作さんが東山町狛鼻溪の絶壁から投身自殺。その同期生が刊行した追悼集に追弔を寄せる。
九月 前任校長の復職（占領軍による公職追放解除）により、岩手県立盛岡第一高校教諭兼県教育委員会事務局員として県教委指導課に勤務。

1949年・昭和二十四年（五十歳） 四月 前校長の突然の退職により、再び岩手県立一関高等学校（四校合併）校長となる。

1951年・昭和二十六年（五十二歳） 四月 岩手県立一関第二高校校長となる。

- 1952年・昭和二十七年（五十三歳）六月 岩手県立久慈高等学校校長となる。
- 1957年・昭和三十二年（五十八歳）三月 岩手県立久慈高等学校長を退職。七月 岩手県九戸郡山形村教育委員会教育長就任。
- 1964年・昭和三十九年（六十五歳）十月 久慈市の長泉寺に毎月一回若い教師たちが集まり、坐禅を組んでいた「豆腐を食う会」で法話。それは以後「歎異抄に聞く会」となって、二十四年間法話が続いていく。
- 1965年・昭和四十年（六十六歳）四月 大島英介氏の岩手県立久慈高校校長赴任を機に、「歎異抄に聞く会」の会場を久慈高校校長公舎に移す。
- 1965年・昭和四十一年（六十七歳）二月 久慈高校において「歎異抄について」を講演。十月 講話集『歎異抄への道』を（手書き・謄写）歎異抄に聞く会から発行。
- 1967年・昭和四十二年（六十八歳）九月 岩手県九戸郡山形村教育長を退職。
十月 長男 尚さんのおられる北上市村崎野に転居。「歎異抄に聞く会」を自宅に移す。
- 1969年・昭和四十四年（七十歳）九月 講話集『歎異抄への道』（活版）再版される。刊行にあたって「御あいさつ」を寄稿される。

- 1970年・昭和四十五年（七十一歳）四月 大島英介氏の水沢高校への赴任を機に、「歎異抄に聞く会」の会場を水沢高校校長公舎に移す。以後岩渕写真館、高橋功氏宅と会場を替える。
- 1971年・昭和四十六年（七十二歳）一月 鈴木彦次郎氏との紙上対談「大地に生きる気概」が元旦の岩手日報紙に掲載される。
- 1973年・昭和四十八年（七十四歳）八月 白井成允先生逝去（八十五歳）、十月 盛岡市願教寺で葬儀。
- 1974年・昭和四十九年（七十五歳） 盛岡中央公民館を会場に、盛岡にも「歎異抄に聞く会」が発足する。月二回、第一週土曜日の水沢会と第三週土曜日の盛岡会とで会が持たれる。
- 1977年・昭和五十二年（七十八歳）初夏 自宅で斎藤洋三氏・金森一郎氏との読書会（ペスタロッチ『草稿 隠者の夕暮』、『隠者の夕暮』、池山栄吉訳『独訳 歎異抄』、ニーチェ『ツラツストラはかく語りき』）を始める。六十三年の九月まで続く。
- 1981年・昭和五十六年（八十二歳）一月 盛岡市新庄町、天満宮近くの借家に転居。
- 1985年・昭和六十年（八十六歳）九月 白内障の左眼を手術、入院。

九月二十二日、二十三日釜石市宝樹寺での夏季精神文化講座で、二日間一日五時間にわたる講師をつとめる。講題は「歎異抄を聞く、人間の力の限界を知ることを通して」。長女恒子さん同行。

1987年・昭和六十二年（八十八歳）七月 「途中で体調を崩して、皆さんにご迷惑をかけるようなことになっては申し訳ないから」と言われて、八月以後の水沢会への出席を断念される。

1988年・昭和六十三年（八十九歳）八月 近くの集会所で開かれた「歎異抄に聞く会」に奥様に手を引かれて出席。四十分間ほど歎異抄第六章について話す。これがこの会での最後の法話となった。九月上旬 体調不調のため入院。家族に「見舞いに来て下さった方は、どんな時でも病床までお通しするように。やがてどなたも体験されることなのだから」と話される。みずから過剰な延命沈痛治療を拒否される。十二月八日 午後四時四十分、心不全のため入院中の遠山病院でご逝去。享年九十歳。

盛岡市北山 願教寺の白井成允先生の墓地の隣に白井先生の筆になる「南無阿弥陀仏」の墓碑を建立、埋葬す。

